

6/11 討論集会

長良川に徳山ダムの水はいらない

Program

2:00 開会 総合司会 丹原美穂

開会あいさつ よみがえれ長良川実行委員会 事務局長 武藤仁

2:10~2:55 基調講演 **清流・長良川のためには何が必要なのか？**

講師 **向井貴彦** 岐阜大学教授

2:55~3:25 発言

堀 敏弘 長良川河口堰建設に反対する会・岐阜

富樫 幸一 岐阜大学名誉教授

近藤ゆり子 徳山ダム建設中止を求める会

3:25~3:35 休憩/質問票集約

3:35~4:30 討論会/コーディネータ 粕谷志郎 長良川市民学習会代表

討論者:向井、堀、富樫、近藤

4:30 閉会挨拶 亀井浩次 よみがえれ長良川実行委員会 共同代表

(講師の紹介)

向井 貴彦 (岐阜大学教授)

1971 年生まれ。滋賀県出身。専門は魚類学・保全生態学。

野外調査、DNA 解析、博物館標本の活用など、さまざまな技術を駆使して汽水魚や淡水魚などの生態や進化を研究するとともに、絶滅危惧種の保全や外来種問題についての研究を行っている。日本魚類学会自然保護委員会委員。愛知県長良川河口堰最適運用検討委員としても活躍している。

基調講演

清流・長良川のためには何が必要なのか？

—揖斐川・長良川・木曽川の違いから見えてくるもの—

岐阜大学地域科学部 教授 向井貴彦

1. 揖斐川・長良川・木曽川の自然は同じなのか？

岐阜県を流れる揖斐川・長良川・木曽川は、木曽三川と呼ばれ、濃尾平野を流れる下流域はかつて網目状につながっていたことから、一つの河川水系として考えられがちである。行政的にも「木曽川水系」としてまとめられている。

現在再開されようとしている木曽川水系連絡導水路事業は、揖斐川源流部の徳山ダムを水源とする導水路を、長良川を経由して木曽川まで引き、長良川の「環境」改善および利水に使うというものだが、これも木曽三川を一つの水系として運用しようとしている。

それでは、実際に木曽三川はどれも同じなのかといえば、そうでもない。地質的にも岐阜県東部の木曽川水系（飛騨川含む）と西部の揖斐川・長良川は異なっており、その結果として木曽川は峡谷が発達し、多数のダムが建設されてきた。また、生物相についても岐阜県は美濃・飛騨の南北だけでなく、東西にも違いがある。そのため、木曽三川の中では木曽川が揖斐川・長良川とは大きく異なっている。

木曽川に比べると揖斐川と長良川は似ており、現在も本巣市から安八町にかけて揖斐川水系から農業用水が取水され、長良川水系へと流れている。さらに下流では逆に長良川から揖斐川へと流れる用水もある。



長良川（左）は兩岸が開けており、ダム建設には不向きだが、木曽川水系の飛騨川（右）は峡谷が発達し、ダムが多数建設されてきた。

2. 木曽川水系連絡導水路は「環境」を良くするのか？

木曽川水系連絡導水路事業は、長良川と木曽川の渇水時に徳山ダムに貯留された水を導水して環境を維持するためとされている。

しかし、それによって揖斐川と長良川で遺伝的に異なる魚類などが混ざってしまえば、遺伝的攪乱と呼ばれる自然破壊となる。もしそうなれば、生物多様性の保全という点で明らかにマイナスなのだが、揖斐川と長良川は中流域以降でもともと用水がつながっており、生物相の違いも少なく、淡水魚の種内の遺伝的分化も（少なくとも現時点では）それほど顕著ではない。予防原則的には水系間での生物の移動を生じさせることはしないで欲しいところではあるが。

それでは、在来生物の遺伝的攪乱の懸念が無ければ、環境改善に役立つといってよいのだろうか？ 最大の懸念は徳山ダムで毎年生じる淡水赤潮やアオコである。水資源機構の公表する徳山ダムの水質については、数字上はそれほど問題ないように見えるが、巨大なダム湖の体積に対して河川の流入量が少なければ、水のターンオーバーに必要な時間が長くなる。その結果として植物プランクトンの発生量も増えると考えられる。特に、長良川や木曽川が濁水となるような場合に、徳山ダム湖のアオコがどうなるかは、大きく懸念される。

また、徳山ダム湖と長良川の水温の差も懸念はされるものの、徳山ダムから直接取水して長良川に放水されるわけではなく、なんとも判断しがたい。

3. さまざまな長良川の環境問題として

木曽川水系連絡導水路とは別に、長良川の実環境を変化させ、生物多様性を損なうことがさまざまに行われている。ざっくりとリストアップすると、1) 国土強靱化事業による大規模な河川敷掘削や河畔林伐採、2) 環境改変の代替として行われる放流事業、3) コクチバスの分布拡大、4) 長良川河口堰、といった問題がある。

これらの問題と比べれば、木曽川水系連絡導水路事業が長良川の実環境に与える影響は相対的に小さいと予想される。しかし、積極的に環境改善に貢献するとも言いがたい。

現在、世界的には「30by30」という目標が掲げられている。これは、2021年のG7サミットで合意され、2030年までに陸と海のそれぞれ30%以上を健全な生態系として効果的に保全しようというものである。上記の長良川の問題の多くは、取り返しのつくものである（コクチバスは定着するとどうにもならないが）。長良川河口堰でさえ、堰を開放すれば実環境への問題は解決する。それに対して、揖斐川や木曽川のダムは恒久的な構造として建設されており、河口堰の開放のようなわけにはいかない。清流・長良川は、さまざまな事業で自然を失いつつあるが、木曽三川の中では最も回復できるポテンシャルがある。こうした状況において、実環境を劣化させる事業をさらに積み上げるのか、30by30を目標とする時代において実環境を回復させる方向に舵を切るのか。

世界に誇れる清流長良川へとよみがえらせてほしいと願わずにいられない。

請 願 番 号	請願第4号
件 名	長良川の環境悪化の危惧を残したままでの木曾川水系連絡導水路事業の継続は容認しないことを求める請願
受 理 年 月 日	令和5年6月9日
紹 介 議 員	可児 隆、服部勝弘、田中成佳、堀田信夫、森下満寿美、 原 菜穂子
付 託 委 員 会	建設委員会
<p>(請 願 要 旨)</p> <p>本年2月14日に木曾川水系連絡導水路事業に関し突然表明された名古屋市長の導水路容認を受け、「木曾川水系連絡導水路事業の関係地方公共団体からなる検討の場」(以下、「検討の場」という。)の動きが速まった。</p> <p>本事業の計画発表以来、長良川の環境悪化を危惧した岐阜市民を中心とする「長良川に徳山ダムの水は要らない」という事業への大きな反発を受け、本事業は平成21年以降凍結されており、国の検証対象事業として現在「検討の場」における検討に委ねられている。</p> <p>一方、名古屋市における水道水の給水量は激減し、新規利水確保の根拠をますます失っている。本事業は、令和3年に開催された「検討の場」第5回幹事会を経て、「令和4年度以降も新たな段階に入らずに環境調査を継続」とするとされた。そうした中で名古屋市長の突然の方針転換は異常なものであり、水道原水を堀川浄化に使うなどの新用途の提案もこれまでの市民の本事業に対する疑問や危惧に答えるものになっておらず、名古屋市の身勝手な提案と言わざるを得ない。</p> <p>本年5月29日に開催された「検討の場」第6回幹事会では、この新用途案も含め事業継続に係る議論の推進が確認されたが、岐阜市が市民の声に応え、長良川の環境配慮の意見を述べられたことに敬意を表する。</p> <p>徳山ダムの水を長良川(岐阜市長良古津付近)に放流することは、世界農業遺産に登録された「清流長良川の鮎」に大きなダメージを与えるにとどまらず、次世代に残さなければならない岐阜市民の最大で最良の宝を失うことにもなりかねない。岐阜市民として疑問と不安を抱えたままでの導水路事業の継続は到底認められるものではない。</p> <p>以上のことから、下記事項について岐阜市議会として決議されるよう請願する。</p> <p style="text-align: center;">記</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 岐阜市は市民の疑問を残したままでの導水路事業の継続を容認しないこと。 2 市民に開かれた「導水路事業が長良川に及ぼす環境検討会」(仮称)を設置し、市民の疑問、不安に応えること。 	